

「新写実小説論」考

加藤三由紀

ここ数年の中国の文芸批評に、一篇一篇の小説の丹念な深い読みよりも、より進んだ、新しい、高次の小説を「発見」する批評の言葉ばかりが先行しているという印象を抱いてしまうのは、私一人ではないだろう。八九年ごろから若手批評家の間で提起されている新写実小説（“新写实小说” 以下、中国語は“ ”で示す）論もその例外ではなく、論評を読みながら辟易してしまったのだが、にもかかわらず、それを取りあげることにしたのは、自ら痛みをもって新写実小説とその論評の中にある思想状況をみてとろうとする文章に出会ったからである。

本稿は、ある小説（群）を新写実小説という用語でくくる事の妥当性を検討するものではない。彼らが同時代の小説をそう名付ける事でどのように小説を、解釈しようとしているのかを探り、そこから新写実小説の意味するものを、いくらか手ごたえのある言葉として受けとめられればと思う。

1 新写実小説の登場

コピーライターの正体は定かではないが、新写実小説とは、実にうまいコピーである。

新时期文学のなかの新写実小説というと、鋭い社会批判を込めた作品を集めた『中国新写実主義文芸作品選』（香港、1980年出版、七〇年代雜誌社）とその続編の数々を連想させるが、ここでとりあげるのは、八〇年代後半からしばしば実験的小説（“实验小说”）との対比で使われるようになった新写実小説である。非日常の時空を駆け巡り、確かなストーリーを持たぬ実験的小説が脚光を浴びていたとき、一方で、ストーリー性豊かな時代小説やホームドラマ風の小説が大量に生み出されていた。九〇年代を迎えようとする頃、ルーツ文学ブームが去り、実験的小説も当初の衝撃力を失いはじめ、にわかになんか日常に密着した小説が文芸批評の舞台に昇ってきた。

その間の文芸界の空気をやや自嘲的に伝える一文を見てみよう(注1)。

1985年と1986年をふりかえってみるに、新小説（“新潮小说” “先锋小

说”“实验小说”“后新潮小说”などの総称として、この論文では用いられている一引用者注)の如何に華やかであったことか。阿城の『チャンピオン』に韓少功の『おとう、おとう』、劉索拉の『選択の余地はない』に馬原の『ガンジスの誘惑』、これらの小説を語る時の人々の気持ちの高ぶりは、今思い起こしても感動的だ。まるで、新小説から小説それ自体の価値を真に見いだしたかのようにだった。(中略)ところが今、やはり突然、人々はいわゆる小説それ自体の価値なるものに、退屈と嫌気を感じてしまった。新小説は、もはや、勵ましを与えることも、深い内省を誘うこともできず、衰退を目前にして、人々の非難や批判の情熱を誘うことすらできなくなっている。

だが、「いまどきの批評家は、一定の期間にある問題を語るのがすでに習慣と化し、中心的な話題のない文学状況を容認できなくなっている。(資料29)」そこに、「新写実小説」という話題が現れた。評論の中には、王安憶の『小鮑莊』(《中国作家》1985年2期)をその元祖に祭るもの(資料20,36)もあるが、主には、池莉『生きていくのは』(《上海文学》1987年8期)や方方『風景』(《当代作家》1987年5期)、劉恒『伏羲伏羲』(《北京文学》1988年1期)、劉震雲『单位』(《北京文学》1989年2期)、李曉『天の橋』(《青年文学》1988年8期)蘇童『妻妾成群』(《收穫》1989年6期)などを代表的作品としてとりあげている。時代小説、家庭小説、農村もの等々、題材も形式も様々で、これらを併せて論じることに戸惑いを感じるのだが、とりあえず、歴史的な視点と個性とを排除した、“油盐醬醋(油・塩・味噌・酢)”“吃喝拉撒睡(食べる・飲む・排泄する・眠る)”の文学といっておけば、或いは一つのイメージを結ぶことができるかもしれない。

リアリズムとモダニズムが奇妙に混じり合ったような、これらの小説の特徴を表すのに、“開放的现实主义”“后现实主义”“新现实主义”“现代现实主义”“现实主义自然化”“新写现实主义”“生态小说”などの用語が考案されていたが、雑誌『鍾山』が“新写実小説大联展”特集(1989年3期~1990年1期、1990年3期)を組んでから、新写実小説という言葉が定着したようだ。それが文壇において優れたコピーであるのは、作家の側からすれば、リアリズムを本領としてきた作家も、前衛的な作風を誇っていた作家も、新写実小説という傘のもとに軌道修正ができるからである(資料33)。一方、文芸批評家に見れば、「‘新写実’」という標語は、‘新’を唱えてきた多くの人々も、‘写実

を唱えてきた多くの人々も、論じたくなるものだ」(資料29)からであり、「主義」をはずしたことで「問題は大きいに研究し、主義はあまり語るな」(資料1)と、たしなめられることもなくなるだろうからだ。

八〇年代、その時々核となる批評を携えながら様々な表現形式を体験してきた中国文学が、核となる批評を失ったところで、新写実小説という、いかようにでも味付けのできる言葉が選ばれたのである。

2 リアリズムか非リアリズムか——新写実小説に託されたもの

『鍾山』は、新写実小説特集を組むに当たり、巻頭言で次のような定義をしている(資料6)。

これら(ここ数年の小説創作の谷間に現れた新しい文学—引用者注)新写実小説の創作方法は、写実を主な特徴としてはいるが、現実生活のありのままの姿の還元(注1)に特に注意を払い、心から現実と向き合い、人生と向き合っている。(中略)新写実小説はリアリズム(“现实主义”)という大きな範疇に入りはするが、(中略)モダニズム(“现代主义”)の様々な流派の芸術上の長所をうまく吸収し鏡にしている。

平たく言うと、基本的にはリアリズムだがモダニズムの要素も取り入れている小説ということなのだが、更に巻頭言は「ある共通の方向に沿って発展しているのではない」ところに新写実小説の特徴があると言う(注2)。まさに、新写実小説とは、枠がないからこそ広まった言葉であり、その定義付けが新写実小説論の眼目になっていくわけである。

ここ数年の動向をしてみると、当初“后现实主义(ポスト・リアリズム)”を掲げていた王干のまとめた三つの特徴が、その後の論議の争点になっていくので、その紹介から入りたい。

三つの特徴とは、①生世界への還元(“还原生活本相”)、②情感のゼロからの創作開始(“从情感的零度开始写作”)③作者と読者が共同して創作に参加(“作家读者共同参与创作”)である(資料1,7)。

一瞥して明らかのように、これらは、現象学批評のタームを借用したものである。リアリズムとの比較でいえば、ポスト・リアリズムは、理念の化身である(かのような)典型を描くのではなく、個別的なものではない類型を描くのであり、作家の主体性を前面に押し出した八〇年代前半のリアリズム小説とは

違って、作家は自身の「精神汚染」を受けぬ客観的眞実を表すのみだから、その分析と判断は読者にゆだねられる、というわけである。

リアリズムからポスト・リアリズムへの移行を表す「‘人生のため’から‘生存のため’へ」（資料51）という言い回しがあるように、作中の人物には所与の環境に自らを染め、うまく生きていこうとする俗物が多い。理想を抱き、よりよき人生のために奮闘する者、理想を抱きながら現実の厚い壁に阻まれて苦悩する人物などは、印象に残らないし、いたとしても彼らはいつものまにか外界に溶け込んでいる。また、人間をある種の極限状況におくことで人間の本質を探ろうとする、ルーツ文学の末裔のようなものもある。作家はディテールを書き込みながら、そんな「ヒト」を淡々と描いていく。たとえば、同じく農村の食糧難、飢饉状態を題材にしても、『犯人李銅鐘の物語』（張一弓、『収獲』1980年3期）と『シヨクリョウノヤローメ』（劉恒、『中国』1986年9期）とでは全く違う。一方は、1960年、飢饉線上にある村民を救うため、食糧強奪の罪名を被って死んだ支部書記を描き、もう一方は「あす、何を食うか」という心配ばかりで一生が過ぎていく村の女を描くという具合である（注3）。

このような小説を何篇か取りあげながら、王千の論を補うもの（資料 3, 32, 34, 36, 39等）については、ここで取り立てて説明を加えるまでもない。これらは、あからさまなリアリズムの否定ではないが、典型論を中心にすえるリアリズム論の「発展的解消」を、現象学批評の用語を借りて展開しているといえよう。

それに対して、「新」とは、「新しい」現実を指すのだとして五四問題小説の再来と見るもの（資料5）、「新しい」リアリズムの方法と解釈してリアリズムの勝利を宣言するものもある。典型、本質、英雄人物というタームを使って王千に批判を加えるものには、やや古い世代のリアリズム論に立った比較的まとまった論として、張翊の『尋ね当てるまでの過渡的現象——新写実小説得失論』（資料51）がある。生存状況を見つめることは21世紀の未来のテーマだと認めつつも、この論文の主旨は、「細目の事実」を除き、「典型的環境のもとにおける典型的人物の忠実な再生産」というリアリズムの原則を放棄してしまっただけのために、新写実小説は改革開放の時代精神からはずれ、時代の英雄を描いていない、それでは現代の生存状況をリアルに表現したことにならないという点にある。新写実小説におけるクンデラの影響の大きさに言及しているあたり（注4）、興味をそそられるが、新写実小説を従来のリアリズムの枠に押し込むため以上の論ではない。（注5）このタイプの論の特徴は、先の王千

らの、新写実小説を新写実主義、新現実主義などと主義という言葉をつけて呼ぶ傾向に異議を唱え、さらには、そもそも新写実小説という言葉さえ不要ではないかと言う点にある。細目の事実を書き込むのは従来のリアリズムの枠を壊す行為だと解釈する論調に、危機感を抱いたようだ。そのような論調については後述したい。

いずれにせよ、新写実小説を巡る論議はリアリズムの理論を本格的に検討する方向へは進みそうにない。ここで注目したいのは、新写実小説や現象学風の論評が現れるような思想状況を、共に生きる者として語った陳思和（1954年～）の論である。陳思和は、李輝との共著『巴金論稿』（1986年人民文学出版社）など個別研究で成果をあげているが、それだけでなく、1985年には黄子平らに先駆けて「二十世紀中国文学」（〈論“二十世紀中国文学”〉《文学評論》1985-5）を提起し、その後『上海文論』紙上に組まれた特集「文学史の書き直し」の立て役者となり、現代中国文学研究に新しい視角を開こうとしている気鋭の若手研究者である。

陳思和は、『自然主義と生存意識』（資料21）というタイトルに、「王千への手紙」という副題をつけて、「新写実」を、その背景を成している思想状況に帰しながら論じていく。概要を示しておこう。

「新写実」は、ヒトの生理、生殖に代表される生存状況の細目を描き出す点で、従来のリアリズムの流れにある自然主義、ゾラの「実験小説」に通じている。それは、従来の典型論では醜悪としかとらえられなかったものに人間性の美しさ、力強さを見いだす。

しかし、今の中国社会が生んだ小説には、明らかに自然主義と相反するものがある。自然主義は確固としたリアリズムの伝統の上に花開いたが、「新写実」はそうではなかった。「新写実」が客観的眞実というとき、それは、「本質」から生活を解釈しようとした、えせリアリズムに対決するものだった。そして、それ以上に、反思文学も含めた十年來の新時期文学が、世界的本質的な意味への探求を回避し、生活の皮相な現象を描くことで現代生活の中の問題に関する作家の認識と態度を表そうとする、主観性の極めて強いリアリズム小説であったことに、対抗するものだった。「新写実」は、人の存在の意味（生きることの価値）を問うことをやめ、生存状況を改変しようとする理想を排除し、生存状況の既定性を強調して生存それ自体の意味を探求するのである。

この論からすれば、「新写実」とは、中国のリアリズムにおける認識論の変更

を迫るものになるわけで、陳は、リアリズムの外に基盤を置く作品を書いている今の作家の思想状況を論の最後で次のようにまとめる。

（自然主義—引用者注）文学の使命は、できる限り真に客体世界に近づき、それを観察し描写することだった。（中略）ところが今の中国小説の生存意識は、相反する観点を暗示している。これらの作品から、以下のことが分かる。作家は、生存の可能性とその現状を表現することに夢中で、客体世界の介入を避け、拒絶する。多くの作家は生存関係を描くのに、まるで実験室で実験しているようだ。閉じられた環境が失われれば実験は続けられないのである。この傾向はほとんど、作家の現実への不信感を暗示している。自己の生命と肉体の生存こそが真実なのだ。

この手紙形式の評論はこれ以上、論を展開していないが、やや割り切った表現で論を進めるならば、新写実小説だけの問題としてではなく、第二次世界大戦後のヨーロッパに凝せられるような、八〇年代後半以降の中国の中心的イデオロギー喪失の時代に現れた小説の共通項として、彼が何を見ようとしているかがわかってくるだろう——八〇年代後半、ルーツ文学の誕生から今日までの大きな二つの潮流に実験的小説と新写実小説がある。実験的小説は、人間にとって必然性を持たぬ不確かな日常世界とそこに生きる人間とを切り刻む。新写実小説は、世界を閉じられた逃れようのない生存状況と規定し外界を固定することで、外界に汚されずに、誰もが同じ顔つきをしているヒトの群れを表現する。一方は日常世界を破壊し消滅させ、もう一方は日常世界を絶対化する。両者は対極に位置するように見えるが、現在・過去・未来という歴史の流れ、人間の営みが造りあげていく社会を、完全に排除する点においては一致しており、それは現実に対する不信感から生まれている態度なのである。——このような態度を実際にどれだけの小説に見出す事ができるか、それが多数派であるかないかはさておき（注6）、現実の世界への不信感を根底に抱いた小説が新写実小説とは、皮肉に満ちた命名である。

3 新写実小説の危うさ

李新宇は、『仮初の生を貪る者とその人生哲学——英雄去りて後の新写実小説の方向喪失』（資料47）で、率直に新写実小説に対する戸惑いを語っている。以下はその概略である。

はじめは、「環境に制約されている以上、それに順応していくしかない」と語りかける作品に共鳴していても、やがて、そんな人生哲学に疑問がわいてくる。それは、現実の生存状況を明確に認識してはいるのだが、同時に、人の解放や完全な人間性というものは時代遅れの神話に過ぎないと宣言している。そんな文学は、「生活を嘲笑し、生活を汚しているだけでなく、自分自身をも嘲笑し汚しているのだ。」かといって、それを批判することもできない。「現実から遊離して、高らかに理想を歌いあげようとは思わない」からだ。

また、陳思和も先に紹介した論の途中で、「生世界への還元」が、激情の消失（“消解”）という側面を合わせ持っており（注7）、そのことは現実の中国社会の存在によって決定づけられているのだと指摘している。現状の窮境に対し、動揺と不安を覚えて奮起し反抗することから、なすすべもなく同定し回避する方向へ、個性主義から自暴自棄の毀滅へ、そんな思想状況が生まれているという。

そこで、陳は、四十年代の大後方を念頭に置きつつ、客観主義と主観公式主義とともに反現実主義とした胡風の『リアリズムの道を論ず』（1948年、注8）の一節を引く。「自分自身に光明を勝ち取ろうとする心があるから、生身で具体的な過程に分け入って光明を反映できるのだ……」と引用しながら、彼自身はこう語る。

今、このような炎の如き真情を抱いた批評家の心の奥底から出た言葉を探そうとしても、どじょうが龍門に登ろうとするようなもの、ほとんど痴人のたわごちに等しい。この批評家の文章を読んでいてこそ、時には、果てしない暗闇の中に一筋の曙光を見るように、暖かさと激情の存在を感じるのである。

この陳思和の言葉、そして李新宇の「現実から遊離して、高らかに理想を歌いあげたいとは思わない」という素朴な表現からすれば、同時代の者として励ましの言葉を発することのできない、同時代の言説から生きていくための励ましを得ることのできない時代を、彼らは生きているということになるだろうか。「新写実小説」と、それをめぐる評論は、そのような時代を端的に語っているのかもしれない。新小説が「励ましを与えることも、深い内省を誘うことも」

「非難や批判の情熱を誘うことすらできなくなっている」中で、明確な主張を持たずに雑多なものを丸抱えすることで市民権を得たような、この用語の登場の仕方自体、そんな時代状況をあらわしているのではないか。

ここに、新写実小説の、強さと脆さが見えてくる。

人間の力で改革することのできない、従って不満だらけの現在の生存状況を作家が「客観的真実」として描き、アクシデントが無ければ未来永劫変わらぬであろうその「客観的真実」を読者が自己をとりまく状況として確認したとすれば、それは、現在の中国社会の状況下において、実際には、現状に対する最も効果的な一撃になり得る。その状況を直接には共有しない国外の読者である私ですら、『愛なんて』（池莉，《上海文学》1989年1期）や『単位』などに、中国庶民生活案内としてのおもしろさがなければ、その世界に生きる俗物の悲しさすら伝わってこない、余りにも軽い人間に、途中で投げ出したくなるような不快さを感じてしまう。山のようなニワトリの羽を掛け布団に、たくさんの人々が落とした“皮屑”を敷き布団にして、心地よく眠っている自分――

『ニワトリの羽がいっぱい』（劉震雲，《小説家》1991年1期）は、最後にこんな夢を主人公に見させる。新写実小説の中のあるものは、この夢と同じ作用を持っている。つまり、「既に慣れきってしまった日常のありきたりの生活」を「こんなにもうとうとしく、見つめることを迫」られる（注9）のであり、「読了後、重苦しさ、圧迫を感じ、息がつけなくなる」（資料35）のである。

新写実小説に対する露骨に政治的な批判がされる（注10）のは、1991年に入ってからだと思われるが、それは小説をこのように読ませる解釈の毒をかきわけたということになるだろうか。中国社会科学院文学研究所当代文学研究室での座談会記録（資料37）にある、次の二つの発言は、このことをよく語っているだろう。

曾鎮南は、「‘新写実小説’という言葉を使わなくても、そう呼ばれている作品について、私は充分、分析し評論することができる」と断った上で、こう語っている。

リアリズムの存在と発展に着目して、リアリズムによって、特に典型化の尺度によって、「新写実小説」という名をかぶせられた作家や作品を評価するのであれば、私はかなり実状にあっていると考える。だが、彼らの作品が伝統的なリアリズムへの反発や挑戦だということに着目して、これらの小説の伝統的リアリズムと異なるところを一つ一つ列挙し、強調する

とすれば、それはかなり強引で、つじつま合わせもできず、しかも、作家がリアリズムの典型化という芸術的概括を行う際の注意力をそぎ、彼らに弱点を長所だと誤認させ、自然主義の邪道へと歩ませてしまいかねない。

また、張焜は、次のようにこの座談会を締めくくる。

「新写実」と見なされている作家達は、いくらかの評論家の「生活のありのままの生態」を表現するとか、「感情のゼロ地点」の達成といった類の定義づけに惑わされることなく、生活をもっと大きな視野でもっと全体的に把握するよう追求すべきであり、歴史や人生に対してもっと積極的な態度を追求すべきだ。喜ばしい事に、いくらかの「新写実」の作家はもうそのようにしている。

座談会全体の基調は、必ずしもこの二人に代表されるものではなく、この座談会がもたれたいきさつも私には明らかではない。また、八〇年代の終わりから今日にかけての小説を新写実小説という言葉で覆いきれるかと言えば、確かにかなりの無理があろう。だが、ここで読みとっておきたいのは、新写実小説という言葉を使ってその小説に従来のリアリズム論からはずれるものを見い出そうとする解釈とそれの作家への影響に、ストップをかけようという意図が、一部に存在するということである。

そのような反応を引き起こすような力のある新写実小説だが、それが対決となるか逃避となるかは紙一重である。読者がヒトの群れの中に自分を見い出さなければ、新写実小説は毒気を抜かれた風俗小説と変わるところはない。そのような読者にとっては、新写実小説そのものが、信頼のおけない現実、客体世界と化してしまい、自己の内面とは無縁なものになってしまうからである。

胡風は、同じく『リアリズムの道を論ず』の中で、客観主義の文芸について、「読者は満足してしまうともう、心安らかに現実の歴史的な要求から遊離した生活態度を続けているのである」（注11）という。数十年もの時空を隔てた言葉を、そのまま今に引張ってくるのは乱暴かもしれない。胡風の客観主義に向けられた刃も、それが史的唯物論の衣をまとっているからこそその批判であり、新写実小説はそもそも歴史的な要求という旗を降ろしてしまっただけで成立しているのだが、それでも陳思和が胡風の客観主義批判を引用したのは、今の小説が、読了後、心安らかに日常生活に戻れるようなものになりかねないことへの

恐れがあったからではないだろうか。生存それ自体の意味を探求することが自己の置かれている現状の消極的同定にすり替えられてしまったら、新写実小説は、生存それ自体の意味、現実への一撃どころか、呪縛としての典型論や英雄人物論との対決という力さえ失ってしまうだろう。

そんな危うさをはらんだ新写実小説が、客観主義、観照的態度とは無縁の、作家と読者を局外者の立場という安全圏から追い払ってしまうような力を持つことができるのであれば、それはどのような仕組みによるのだろうか。生存それ自体の意味の探求は、そういう仕組みの上にこそ成立するものである。新写実小説論をたどってくると、次にはこのような課題が生まれる。小説と評論を丹念に読みながら探してみたい問題である。

(注)

注1 この論文(資料29)は、新小説との対比で新写実小説をとらえ、新写実小説は、人生の価値を再認識し、歴史の真の姿を再認識する可能性を与え、読者に作品を読み解く自信を回復させるものと考えている。ところが、「新小説の批評家」は、新小説が既に多くの読者に見放されている状況にありながら、新写実小説をも、新小説の理論で解釈しようとしているという。「文革期の文学が服従していたのが政治概念だとすれば、この時期の新小説が服従しているのは言語学の概念である。両者はともに現実から極端に遊離している。ちがうのは、前者が文学を破壊したのに対して、後者は文学を救うという幻想を造りつつある点」だが、新小説の時代に打ち立てられた文学の意味がそれほど重要でなくなってしまった今、新小説に別れを告げるのは「まさに到来している現実だ」と結論づける。「新小説の批評家」への擲論に満ちたこの論文に共感を覚えないでもないが、社会状況が変わり新小説に読者が背を向けている(その判断がどの程度精確かはわからないが)ことを作品評価の中心にすえる態度には、体制に組み込まれかねない危惧を感じる。

注2 一篇一篇を筆者はまだ細かく検討していないが、資料28によれば『鍾山』に新写実小説として掲載された作品だけについても共通の方向を見いだすのは難しいという。

注3 資料51の張鞞論文では、日々の糧が無くては人は生きられぬという生存のレベルしか表現していない『シヨクリョウノヤローメ』より、崇高な精神を表わした『犯人李銅鐘の物語』のほうが強い衝撃を与えると価値づける。

注4 殷思「中国におけるクンデラ(昆德拉在中国)」(《明報月刊》1992年8

月号)によれば、ミラン・クンデラの創作は、『笑いと忘却の書』と『不朽の名声』以外のほとんどが内部資料として翻訳刊行され、版を重ねているという。莫言にクンデラの「エルサレム講演—小説とヨーロッパ」に触発された随想「神が笑っていると分かっているが、なぜ考えようとするのか（明知上帝在发笑，为什么还要思索）」（《小说选刊》1988年4期）があるほか、クンデラを愛読書にあげる文学者も多い。劉恒が編集に加わっている《北京文学》は、クンデラとサーモンの対談「小説技法についての対談（关于小说艺术的谈话）」「創作技法についての対談（关于结构艺术的谈话）」（1988年10期）を掲載している。

注5 張鞞と同じ観点から新写実小説を論じている張炯は、力のある作家達が方向を誤り才能を伸ばせなくなるのではと危惧を表明した上で、「“新写実”の作家たちに十七年（49年から66年まで—引用者注）もしくは八十年代初めのリアリズムの軌道に戻れと勧めるつもりはない。そうではなくて、生命体験・生命意識・生存状態を表現する事とある時代の社会関係や社会矛盾を反映する事とを対立させぬよう望んでいるのである。」（《作品与争鸣》1991-5〈关于《伏羲伏羲》和“新写实”小说的对话——答《作品与争鸣》记者〉）と断っている。新写実小説の中に、作家が無視しようとしてもしきれぬ、ある時代の社会関係や社会矛盾が表現されていることを指摘するのならともかく、典型・階級などの言葉だけを持ち出して「望み」を表白するのは、「昔に帰れ」と言うのと変わらない。なお、最後に対談相手の記者は文芸界のリーダーとしての張炯に、「あなたの意見には反対の人もいますが、気にかけませんね」と、確認を取っている。

注6 資料54は、当初、書き方はモダニズム、書く対象はリアリズムという具合にリアリズムとモダニズムの間に立っていた新写実小説が次第にリアリズムに傾斜し、新写実小説の批評の言葉が小説の実態とかけ離れたものになりつつあり、それが批評に焦りを生んでいると言う。

注7 王光東（資料36）は、生活の原色の魅力を表現するために、作家は自己を消し去る、そのために作品の情感が薄くなり、ひいては作品が人を感動させる力を弱めているとする。）

注8 『胡風評論集（下）』（人民文学出版社、1985年）に依る。

注9 蔣原倫「阅读感受」（「《一地鸡毛》四人谈」《小说月报》1991年3期）。

注10 懷冰（資料48）は、李万武の評（資料38）が新写実小説締め付け開始の先触れではないかと危惧している。

注11 注8参照。

(资料)

- 1 旋转的文坛——“现实主义与先锋派文学”研讨会纪要
李兆忠 文学评论1989-1
- 2 超现实与纪实——小说流到哪里去？
王干 人民日报1989-2-23(6)
- 3 生活形态的审美还原——谈近期小说创作的现实主义态势
余昌谷 江淮论坛1989-3
复印报刊资料中国现代、当代文学研究
(以下、复印报刊资料と略す) 1989-9
- 4 不定式表达：小说写实新变 吴方 上海文学1989-4
- 5 生存本相的勘探与失落——新写实小说得失论
张韧 文艺报1989-5-27
- 6 “新写实小说大联展”卷首语 本刊编辑部 钟山1989-3
- 7 近期小说的后现实主义倾向 王干 北京文学1989-6
- 8 新潮小说与新现实主义小说评述
林道立、丁帆 文学报1989-7-27(3)
- 9 新写实小说在文坛兴起 文汇报1989-8-18(2) 复印报刊资料1989-9
- 10 残酷：新现实主义小说的审美风范 杨全刚 批评家1989-5
- 11 “新写实”小说的兴起 王干 小说月报1989-11
- 12 “新写实”小说讨论会(《钟山》、天津市文联《文学自由谈》编辑部)
王十一 人民日报1989-11-28(6)
- 13 《钟山》“新写实小说大联展”写照 汪政、晓华 上海文论1989-6
- 14 “新写实小说”笔谈 董健等 钟山1990-1
- 15 写实小说——从传统到现代的转化 陈骏涛 钟山1990-1
- 16 众说纷纭“新写” 王十一 钟山1990-1
- 17 新现实主义·新现代主义
方方等 当代文坛报1990-2·3期合刊(未见)
- 18 从深沈心态看历史漫润——有感于“新写实小说”
吴调公 钟山1990-2
- 19 写实·现实主义·新写实——由“新写实小说大联展”说起
潘凯雄、贺绍俊 钟山1990-2

- 20 新写实小说的位置
主持人：王干，参加者：费振钟、王玮、汪政 上海文学1990-4
- 21 自然主义与生存意识——致王干谈新写实小说
陈思和 《马蹄声声碎》（1992年学林出版社）
原载（《钟山》1990-4）では副題を“对新写实小说的一个解释”とする
- 22 “新写实”的真正意义 汪政、晓华 钟山1990-4
- 23 我看“新写实小 谢海泉 当代作家评论1990-4
- 24 “新写实主义”的美学追求 张德祥 当代作家评论1990-4
- 25 长篇小说的新写实主义（文学批评信息）
（阿金摘） 当代作家评论1990-4
摘自 张志忠〈铅华洗尽见天真——读长篇新作随记〉解放军文艺1990-5
- 26 论作为实践形态的新写实主义——写在“新写实主义”倡导周年
於可训 当代作家评论1990-5
- 27 “新写实”理解种种（文学批评信息） 当代作家评论1990-5
- 28 别把小说太当“小说”——读《钟山》“新写实小说大联展”诸作
陆晓声 当代作家评论1990-5
- 29 告别新小说时代 郭银星、辛晓征 当代作家评论1990-5
- 30 论新现实主义小说的美学特征 小说评论1990-5（未见）
- 31 “写实”谈丛 吴方 上海文学1990-6
- 32 新写实小说的叙述态度与方式
张德祥 文学评论家1990-6-9/10-15 复印报刊资料1991-1
- 33 矛盾焦灼中庸——对新写实主义小说作家的心态的假定性论述
吴义勤 艺术广角1990-6 复印报刊资料1991-3
- 34 现实·现实观·现实主义——论『新现实主义』的发生意义
张德祥 山西文学1991-1
- 35 “新写实小说”的导向问题
宏达 当代文坛1991-1 复印报刊资料1991-3
- 36 新写实小说的美学特征及其值得注意的问题
王光东 文艺争鸣1991-1 复印报刊资料1991-3
参考 新写实的局限（硃摘，当代作家评论1991-2 文学批评信息）
- 37 “新写实”小说座谈辑录
中国社会科学院文学研究所当代文学研究室 文学评论1991-3

- 38 不诚实的“还原生活”——对一种小说新观念的质疑
李万武 文艺报1991-4-27(3)
- 39 论“新写实”文学思潮
张学正 中州学刊1991-3 复印报刊资料1991-9
- 40 现实主义与新写实主义 文艺理论研究91-4 (未見)
- 41 自然主义复萌了吗(文学批评消息)
(山原摘) 当代作家评论1991-4 摘自 雷达论文 作家1991-5
- 42 自觉与不自觉的选择——新写实主义在长篇创作中的表现
林为进 文艺评论1991-5 复印报刊资料1991-12
- 43 文化与人生的二重奏
牛玉秋 文艺评论1991-5 复印报刊资料1991-12
- 44 审美选择与读者意识(新写实主义小说一解)
罗春生 文论月刊1991-6 复印报刊资料1991-9
- 45 写实的多种可能 小说月报1991-7
- 46 新写实主义新在哪儿? 沈善增 上海文论1991-4
- 47 苟活者及其人生哲学——英雄远去之后新写实小说的迷失
李新宇 河北文学1991-9 复印报刊资料1991-12
参考 新写实小说的迷失(毒摘, 当代作家评论1991-6 文学批评信息)
- 48 新写实小说的危机 怀冰 争鸣1991-9
- 49 “新写实”小说是什么 胡宗健 作家1991-12
参考 “新写实”流派分析(当代作家评论1992-2)
- 50 新写实:本质的存在与琐碎的方式 文艺评论1992-1(未見)
- 51 寻找中的过度性现象——新写实小说得失论
张初 文学评论1992-2
- 52 评“新写实主义”的理论鼓吹 李万武 作品与争鸣1992-2
- 53 写实内外——说刘震云 张业松 上海文学1992-3
- 54 龃龉与回归——关于新写实批评与创作走向的思考
李晓峰 当代作家评论1992-4
- 55 关于新写实主义小说的主题与创作倾向
金圣 作品与争鸣1992-4
- 56 池莉与她的“过日子小说” 周介人 文学报586, 1992-6-18
- 57 现实主义与“新写实”小说 王世德 文艺报1992-9-19(3)
- 58 关于“新写实”小说讨论的综述 文艺报1990-8-4